

昭和の青年将校運動

秦 郁彦

昭和戦前期の青年将校運動は、二・二六事件の連想もあつてか三島由紀夫流の純化された肯定的イメージで語られる傾向がある。そのせいか、彼らが信奉した軍事クーデタやテロリズムの暗い破綻的側面はとく見落とされがちだ。さらに目標達成の観点から眺めると、テロは完遂したが三月事件、十月事件、五・一五事件、二・二六事件、宮城事件などの諸クーデタはことごとく未遂か不発に終わった。クーデタ後の後継内閣首班に擬した宇垣、荒木、真崎、阿南ら各將軍の登場も立ち消えてしまう。これほど失敗がつづいたクーデタの例は稀だろう。

青年将校たちがモデルとしたのは、幕末の若い下級武士(青年将校)が主動した明治維新の成功体験であつた。だが優先目標の設定で違和が生まれた。スローガンの差異に着目すると、幕末の志士たちは「尊皇攘夷」で国土防衛を至高の目標に据え、そのための政權交代を正当化する「尊皇倒幕」を組みあわせて行動した。ところが対象には天皇が重用する「君側の奸(重臣)」や明治維新の功臣や後継世代が占めた政財界の大物、さらに身内である軍内他派閥の幹部まで加わる。

ともあれ不毛に終わった青年将校運動の特異点を、箇条的に列挙してみよう。1、カリスマ的首領の不在、2、自前の思想を生みだせず、外部の師父(天川周明、北一輝、平泉澄ら)に依存、3、派閥抗争の比重が異様に高い、4、破壊的行動だけで、建設プログラムが欠如、5、天皇制と天皇個人の混同、などだ。少し説明すると、1と2は相關するが強力なトップが登場せずに終わったことを指す。3については運動のエネルギーの過半が派閥抗争に吸いとられた。二・二六事件で、皇道派は統制派に敗れたが、日中戦争、大東亜戦争という「尊皇攘夷」の時代を生きてびて平泉の影響下で終戦クーデタに至る。

4の論点だが、二・二六事件で陸相に交付した決起趣意書は「八紘一宇」「国体の尊嚴」「奸賊の誅滅」など神がかつた美句ばかり、具体的な要求は統制派系幹部の除去や皇道派幹部の招致などで、国家改造に向けた政策提言はなかつた。唯一の例外に「皇政維新法案大綱」という文書がある。執筆者は皇道派の大岸頼好中尉で、北一輝「日本改造法案大綱」(一九一九年)の借用に近いが、広汎な国家改造の具体策が示されている。5との関連でめだつのは「天皇大権」の濫用である。

一部を例示すると天皇大権の発動(親政)により「一切の政党を禁止」「憲法を停止」「両院を解散」と並ぶ。国家改造どころか共産革命をしのご奇矯な諸政策が羅列されているが、核心は実務の担当者である。大綱は天皇が任命する改造内閣、それを支えるのは郷軍人団(実は青年将校団か)としている。では天皇が大権発動に異論を唱えたらどう対処するのかだが、そうした事態を想定した気配はない。明治維新の志士たちは、天皇を「玉(ぎよく)」と呼びあい、思うままに操れると割り切っていたのに似た心情だったのか。

それでも従わぬ天皇は身の安泰が危なかつた。後醍醐帝のように北朝系と差し替えられたり、後鳥羽上皇のように鳥流しにされたり、毒殺説も流れた孝明帝の諸例を昭和天皇は意識していた。

一九四五年八月、終戦を望んだ昭和天皇に対し、軍務局や近衛師団の青年将校たちは天皇を継戦に翻意させるためのクーデタを企てた。しかし天皇の巧みな対応もあり、さわいところでクーデタは不発に終り、終戦が実現する。それは青年将校運動の終焉を告げるものでもあつた。